

エリカ（仮称）の祈り

藤岡 純一

私の通うバレエ学校では、毎年、春休み時期に発表会が開催される。大人教室の演目は、眠れる森の美女など古典作品の一部を切り取り、通して二十分程度のものとするのを常例としていて、前年の秋深まる頃から振付その他の準備が進められる。

令和二年は、四月二十九日の日曜日、場所は尼崎の市立ホール、演目は<コッペリア>の第三幕、私の役は、コッペリウス博士となった。熟年後期の貴重な男性という異色さのおかげで、目立つところを充ててもらっている。

コッペリウス博士は、少女の人形を作り、溺愛する、変な老人である。

ある夜、その人形が勝手に踊り出す。人間のダンサーが人形になり替わって人形のようなギクシャクした動きを見せる。首をカタンと折ったり、肘や膝を固定させてその先の四肢をブラブラさせたりする、その振りが見せ処のひとつとして、バレエファンの記憶に留まる作品である。

そのリハーサルも始まる前の、前年九月のある日のレッスン終わりに先生から、コッペリアで使うような人形を持ってないか？ と藪から棒に質問される。あなたなら持っていてもおかしくないかと。

あれこれダンスの舞台経験をつんだおかげで使用したコスプレが狭いマンションの置き場所に困るほどのセレクションになっている。そんな好事家ぶりを見込んでのお尋ねとわかるので、

「持っていませんが、ちょっとあたってみます」

と思案数秒で返事した。こういう難題を頂戴するのは名誉なことだし、楽しいタスクとなるはずだ。先生は、ウインクを返してくれた。

まずは要件定義だ。コッペリアの人形には何が求められるか？

- 1 人の等身大を目指す
- 2 顔立ちはできるだけリアル
- 3 組み手ができるやわらかい腕がある

プログラムを作るような厳格な定義は必要ないから、とりあえずこの程度にして、あとは追い追い追加修正していく。

できるだけ望まれる要素としては、次のようなものもある。

- ・軽いこと（持ち上げる必要がある）
- ・動きに対して耐久性があること（本番前にリハーサル数回）

ヤフオクとメルカリでマネキンを探した。商品はあるが、一体のお値段が目安的な予算をはるかに超えているし、中古のお安いものは見当たらない。なにより胴体四肢が硬直しては、踊りの相方にならない。あやつり人形のようにカラダのパーツパーツが分解できるも

ので、形成されるべきだ。

上半身トルソのハンガーを見つけた。

漆黒のプラスチック製で、頭と足がない。頭の代わりに首にはハンガーフックが付いている。胸部は女性のラインを形成していて前面の皮膚だけを成形したタイプで、背中にあたる場所は空虚になっている。腕は、半袖、それも短めのもので覆うことができる長さだけ。かわりに腕にあたるポール状のものが2本ついていて、曲げることができるし、脱着も可能で、長袖を着せるときには付けて、半袖を着せるときは外して使用するようだ。

これでイメージができた。この上体前面表皮のみのトルソに服を着せればよい。

頭と下半身はどうするか？

[マネキン 頭部]で探すと、スキンヘッドやバリカンで剃ったあとのような怪異な頭だけの女性がずらりと出てきた。美容学校の調髪の練習台と注釈がある。カット前のロングヘアのものやガーリーなものもあって、品定めが楽しい。

多くは同じ成形のもので、眉は細長、目は大きめで涼やか、鼻は細く高く、口角は緩く引きあがっている。首の下には、机や板に据え付けることができるように万力を兼ねた取っ手が付いている。

この調髪練習台をトルソに乗せて、衣類上下を着せれば、等身大の人形が概成する。足はズボンだけでもいいし、何か芯材をいれてもいい。

衣類は、ホラー映画「it」のピエロのコスプレ用の上下があって、大人用Mサイズで即断した。グレーの長袖トップスと同じ色のボトムス。コスチュームそのものには、恐怖感はない。赤くてアンパンぐらいの大きさのボタンが四個ついていて、舞台むきに見えた。以上3点を提示価格でポチった。

○トルソハンガー 2,610円(910円)

○調髪練習台 1,968円(983円)

○コスチューム 2,441円(1,304円)

(括弧内は郵送料)

合計ざっくり七千円。

令和二年一月二十三日・

取り寄せたブツが揃ったので、加工に着手する。

トルソハンガーは片手で楽に持てる軽さだった。調髪練習台は、人間の頭もこんな重さかと思われる予想外の重さで、表面は、少し弾力のある皮膚感がある。

トルソハンガーの上部フックはネジをほどこだけで取り去ることができた。

調髪練習台とトルソとの接合が第一の難題だった。

首から下しかないトルソの頂点部に調髪練習台の取っ手を噛ませる。頭部は固定でき、取り外しもできる。しかし、調髪練習台の方にも首がある。トルソの首と足し算することになって、首の長さが異常に長くなる。バレリーナの首は長いとはいえ、限度を超えて、ろくろ

首に近い状態となる。

どうするか？

トルソの頂点部に穴をあけて、調髪練習台の取っ手を貫通させることができるくりぬきを作ることにする。トルソの鎖骨にあたる位置に板をわたして、取っ手の万力を噛ませる。

これでも、首は長いことは長い。コスチュームに付いているマフラー様の布で隠して首そのものを露出しないことができるので、人形なのだから多少の誇張として許容されてよいかと甘えさせてもらうことにする。

二月六日

トルソは前面半分しかなくて背中がないので、胴体の厚みが物足りないため、トルソの腰にカーブのついたプラスチック・プレートをわたしてヒップラインにした。

まだまだ作り込みが必要だが、本番舞台まで三か月を切っている。ひとまず皆さんに披露して、ご意見をいただくことにしようと思い、写真をとって、教室への持ち込みを連絡すると、先生からは人形の名前を質問された。

長髪のプロンドとウクライナ美人のように白い肌と整いすぎな目鼻口。怪しい魔力をもつような存在になればと、エリカにする。

先生への返信には、「エリカ（仮称）」とした。人形も暫定なら、名前も暫定だ。

二月八日

エリカ（仮称）を恐る恐るスタジオに持ち込んで、覆い布を取って、エリカ（仮称）の全身を持ち上げると、女性陣の皆さんの嬌声を受けた。

案の定、首が長すぎる、頭部かトルソのどちらかの首をカットしたらどうか、という当然の指摘を受けた。許容範囲ではという反論には、首を傾げられて、暗黙の圧力を受ける。

博士が踊るときには、人形は椅子に座らせておくが、お尻も前面半分しかないので、背もたれがあっても不安定で、少し手が当たったりすると転倒する懸念があることもわかった。

二月九日

調髪練習台の方は、中心軸に金属が入っているので、うちのDIY工具セットの能力では、切断はむずかしそうだった。トルソの方の首をカットするのは、水平面がなくなってしまうので、頭部を安定して支持する接着構造を新たに作り出すという、別の課題が発生する。トルソにしても頭部にしても、外形をカットして失敗すると再度調達の日時が必要になる。コスト負担ももったいないので、できるだけ避けたい。

うんうんうなって、うなって、ひねり出した解決案が、肩を上げることだった。上げ底の反対で上げ肩。トルソの首のまわりをカサ上げれば、相対的に首の長さを縮めることができる。アメフトの肩パットを厚くするようなものだ。

トルソの両肩にペットボトルを横に沿わせてみる。トルソの肩とペットボトルに穴をあ

けて、針金を糸代りに回して固着させた。トップスを着せれば、ペットボトル肩パッドは隠すことができ、エリカ（仮称）の首が調髪調整台のものの長さに縮まった。相対的にバストトップが下がってしまったが、それほど突出しているものでもなく、トップスにゆとりがあるので、気にならない。

次の宿題は、椅子着席での安定。本番舞台では、舞台スタッフさんが椅子を用意してくれる。両肘置きで挟み込んでもらうとか、椅子の形状によっては問題にはならないし、背もたれにフックのような引っ掛けをつけてもらえれば、背中に紐を付けて落下防止できるので、舞台スタッフさんのお知恵を拝借して解決できるだろう。

三月二日・

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、スポーツクラブからスタジオレッスンの休止の案内をいただく。メンバーになって二十年余、バレエのスタジオレッスンに参加するようになって十五年経過したが、こんなことは初めてのことだ。

新型コロナウイルス感染は予想より穏やかなペースで制御されていると思うし、暖かい春になればおのずと収まるはずだと思っていたが、長期戦となるということを実感させられる。

バレエ学校発表会の演目コッペリア第三幕には、〈祈りの踊り〉というヴァリエーションがあって、その曲が流れている間は他の方々とともに、舞台端で祈りの姿勢をとる。

実生活でも、まさに祈りの日々が続く。

三月三十日

バレエ学校の先生から〈不本意なお知らせ〉なるタイトルのメールを頂戴する。

四月二十九日に設定されていた定期発表会の中止が決定された。半年がかりでリハーサルを重ねていて、通し稽古・踊り込みの段階に入っていた。残念ではあるが、バレエを習うお孫さんの晴れ姿を楽しみにするおじいちゃんおばあちゃん方のお客さんをメインに考えたとき、感染リスクのある閉鎖空間に長時間滞在いただくのは、舞台の上と客席のお互いにとって気づまりなことだ。同じ時期のイベントが続々と中止・延期を決めている流れから、どうなのだろうとの思いを引きずっていたところだったので、決定連絡を得て、逆に気分はスッキリした。

バレエ学校も四月から休講となった。

エリカ（仮称）は、バレエ学校の道具類の収納庫の片隅に置かせてもらっていた。

四月から五月まで

四月八日に国の緊急事態宣言が発出された。自粛生活が続く。NETFLIXで映画「男はつらいよ」の全四九作を毎夜一編ずつ再生させた。渥美清の表情とかしぐさとか、コッペリウス博士の参考になるはずだ。

六月二日

国が全世帯に各二枚を配布するという、前代未聞の「アベノマスク」が到着した。総理のメッセージが入っていると思っていたが、厚生省作成の趣意書だけだった。

月が替わって、本日からバレエ学校が再開された。玄関で出迎えてくれた先生から検温と記録用紙の説明を受けて、関門を通過する。検温機では 34.4 度という異常値がでたが、この数字を書くのは、なにか失礼な感じがして、記録用紙には、朝 36.4 度・現在 36.4 度で提出した。

マスク着用とされたレッスンは、苦手なストレッチがこれまでより長い時間続いたあと、シンプルめなバーレッスンで終わる。三月末以来、丸々二か月レッスンがなかったが、関節音が鳴るということはなく、まずまず無事にできた。ただルルベ（つま先立ち）で静止するのが、退化していた。バランス系は、少し時間がかかるかもしれない。ターンもジャンプもなかったが、久しぶりの汗、汗腺の深いところから老廃物が排出される感じの汗は、こちよよい。

八月十五日

いつもならお盆休みで、先生は帰郷され、レッスンは休講となるのだが、秋の開催と決まった発表会のリハーサルを優先された。

バレエ学校の道具入れに置きっぱなしにしていたエリカ（仮称）を持ち帰る。

八月十八日

エリカ（仮称）の最終調整。

振り回したときに外れることがあった首を本番使用に耐えるものとするため、トルソに結合させている土台に頭部取っ手をボンドで接着した。

さらに手袋と靴下を追加した。靴下には包装プチプチを詰め込んだ。適度にカットしたストローを束にして手袋の指に差し込み、掌には靴下と同じ処置をする。軽いのがよい、お金をかけないのもよい。

八月三十日

夕方からスタッフ下見の通し稽古。本番同様のお衣装をつけ、本番同様の進行を舞台スタッフさんに見てもらおう。もちろんエリカ（仮称）も本番同様に登場させる。

演目序盤の次に、いくつかの趣向の違う踊りが続く、その一つが「祈りの踊り」だ。

上体を前傾させた女性が胸の前で手を合わせて祈りのポーズを取る。何を祈っているのか、先生から説明を受けたことはないが、なんらかの願いを実現させようとする気持ちを込めて、ゆったりとした曲で踊り、祈りのポージングで終わる。

この踊りの前後に出番のある他に出演者も舞台の両サイドに並んで、お客さまもどうぞ

いっしょに祈ってくださいと誘い込むように、祈りのポーズを取り続けて、舞台中央のダンスに厚みを加える。舞台全体に清澄な空気が流れるように感じる。

これが終わると、「祈りの踊り」が醸し出したしめやかな空気を換気するために、舞台回したるコッペリウス博士が上手からしゃしゃり出る。椅子に座すエリカ（仮称）にひと言ことわりを入れるマイムをして、舞台を歩きあるいは跳びながら横断し、下手側につくと、振り返り、椅子の人形に向けて、上体を弓のように反らして、手を矢のよう解き放って、大仰にキスを飛ばす。

そのあと後列に並んでいた糸巻娘たちが前進して、素朴だが軽やかなステップを刻む「仕事の踊り」が始まる。少ししてその列に博士も合流して「仕事の踊り」を完了させ、次の踊りに引き継ぐ。

踊りのリレーの最後は、華やかなパドドゥが締めくくる。

そして、パドドゥのお二人がお辞儀をすませてセンターをはずれると、私がエリカ（仮称）を抱えて、後方から前進し、舞台中央で社交ダンスのようにエリカ（仮称）と踊る。右に左にステップを踏んで、最後にターンするとき自分の足を踏みつけて、すっころび、エリカ（仮称）を放り投げる。このドタバタ道化シーンがスパイスとなって、早いテンポの音楽に乗るコーダ部（各人の出番の要約をつないで、総踊りで締める）が進行して、舞台の幕が降りることになる。

九月十三日

本番の前夜に緊張で熟睡できないのは、まああることだけど、最近は慣れが勝って、睡眠できていたのに、今回は熟睡状態に入れず半熟な感じのまま寝床で仰向きを続けた。

午前九時会場ホール入り。

すぐさまエリカ（仮称）の所在を確認する。ホール裏の壁に小道具類と並べて、座らせてもらっていた。ブロンドの髪が編み上げられていた。空中に放り上げたり、ターンでぶん回したりするとき、ストレートなロングがザンバラになってしまうのを先生が気にかかられたのだろう。

心配していた人形を座らせる椅子は、高い背もたれに両脇に肘掛がついて、さらには、座布団はふかふかで後ろにかけて沈みこんでいて、滑り落ちる心配がない。さすが熟達の大道具スタッフさん、リクエストに応じてくれていた。

本番。

とっばなの舞台下手からの出が八カウント早まってしまった。エリカ（仮称）を抱きかかえて、ツーステップしつつ登場してから、本来の出の音が聞こえて間違いに気付く。一人だけの出番なので、しらばっくれて、後の音に合わせるようウォーキングを八カウント増やして、辻褄を合わせた。

ハプニングはここだけで、あとは問題なかった。

ただ、リハーサル時は感染防止のため、マスクを外さなかったことが災いして、表情の工

夫がないまま、ぶっきらぼうを通してしまった。もともと顔演技ができていないわけではないし、期待もされていないが、自粛期間を通じて寅さんに師事したつもりだったのが、すっかり抜け落ちてしまっていた。

九月十四日

本番終了の夜は、緊張から解放され、肉体の疲れもあって熟睡するのが常なのに、寝入るのは早かったが、なぜか夜半に目覚めて、その後は浅い眠りと水を飲みに台所を往復したりして、前夜に続き、熟睡できなかった。

これは、人形の＜祟り＞なのではないか。

本番に至るまで、人形を認識するときに仮称を取らなかったのが、心裏に負い目となっていたかもしれない。他にもっと良い名づけができるのではないかと、最終決定を引き延ばしていたが、それが偏愛すべき相方への思い入れの欠如を招いたかもしれない。人形に＜たましい＞を入れる最後の調整ができてなかった。踊りの中で、人形を生き活きた存在のように見せることができなかった。もっと工夫できたはずだった。

人形は、ほかの小道具やお衣装などとともに、バレエ学校に戻されていた。私を含めて人形の引き取り手はなく、本番の二週間後、先生が分解し、処分してくれた。

そのことを伝えるメールには、ごみ出し場でしっかりお祈りしました、と末文がついていた。